

Essay  
エッセイ

# 釧路・繁華街移動物語

鉄道と治水工事が、街を幣舞橋の北に引き寄せた。

和田 哲



▲ 大正9(1920)年、阿寒川の治水事業が進行していた頃の地図。幣舞橋の北側にも市街地が広がり始めているものの、まだ南側が中心だ。  
釧路区市街図(釧路市立博物館所蔵)



▲ 同じ範囲の現在の地形図。  
国土地理院電子地形図

## 幣舞橋の南側から始まった釧路市街

釧路川の幣舞橋は、世界三大夕日に染まる姿が一番いい。橋の北岸と釧路駅を結ぶ約900mは、北大通と呼ばれるこの街のメインストリート。閉店後もそのままになっているデパートの建物が寂しいが、昭和36(1961)年に完成した道内に現存する唯一の民衆駅(国鉄と地元が共同で建設し、商業施設が入居する駅舎)を望む広い通りには、どこことなく風格がある。

一方、橋の南岸には高台が広がり、神社仏閣が連なる静かな雰囲気。港町としての釧路は、この橋南から始まった。橋から続く南大通が旧市街のメインストリートだ。釧路国の一之宮とされる厳島神社も旧市街の高台にある。文化2(1805)年に場所請負人・佐野孫右衛門が広島・厳島神社の分霊を祀ったのが始まりだ。

アイヌの人々が古くから川筋に暮らしていた釧路には、江戸時代初期から漁業や交易を目的とした和人が進出した。木材や昆布などが船で大量に積み出され、全国からの出稼ぎも盛んだったという。やがて、釧路川上流の硫黄や海底の石炭がこの街の運命を変える。硫黄は当時

大量に必要なマッチ作りに欠かせない資源であり、海のすぐそばで石炭が採掘できることは大規模な工場の立地条件として最高だった。明治中期からは鉱工業が発展し、道東の中心地として存在感を増していく。南大通には丸三越後屋呉服店などの商店や料理屋が華やかに軒を連ね、大いに繁盛した。

## 阿寒川を釧路川から分離する大作戦

だが、発展を続ける釧路には弱点があった。蛇行しながら釧路川の河口近くに合流していた阿寒川が大量の土砂を流入させていたのだ。そのせいで釧路川はしばしば氾濫し、幣舞橋の北側の低地を何度も水没させた。

これを解決するために、明治23(1890)年から阿寒川の治水事業が始まる。まず、現在の山花にあった沼から大楽毛川下流に水を流す第1分水溝(6.24km)を掘削。次いで明治32(1899)年には現在の北斗で川を分岐させて第1分水溝に流す第2分水溝(2.75km)が完成した。下流部では、阿寒川を釧路川から切り離す工事を大正3(1914)年から大正6(1917)年にかけて実施。現在の



1. 中心街だった時代の橋南エリア・真砂町付近を撮影した、明治39(1906)年の写真。(北海道大学附属図書館北方資料室所蔵)
2. 橋南にあった丸三越後屋呉服店。初代は札幌の丸井今井で修業。後の百貨店・丸三鶴屋の前身だ。([「北海道拓殖写真帖」より])
3. 現在の幣舞橋は昭和51(1976)年に架け替えられたものだが、名橋と呼ばれた先代の橋の面影を残すようデザインされている。

鳥取から直接海に注ぐように流路が変更された。

大正9年(1920)8月、大雨による大洪水が発生。浸水した家屋は2,000戸を超え、特に急速に発展しつつあった幣舞橋の北側に壊滅的な被害をもたらした。阿寒川はこの時の氾濫で流路が自然に変わり、全ての水が第1分水溝に流れ、大楽毛で太平洋に注ぐ川となった。

### 街の基礎を固めた新釧路川掘削

一方の釧路川も、この大洪水を踏まえて治水事業に着手。水量が増えても安全に流下させるために、釧路湿原から鳥取の旧阿寒川河口までの直線新水路(11.2km)を掘削した。現在の新釧路川である。中心市街地を避けて、西側で直接海に注がせるという大事業だ。

掘削には、当時最新鋭の掘削システムだったエキスカベーターが導入された。これは、回転式ベルトに取り付けた無数のシャベルが土砂を掘り、そのまま運搬車に積み込む装置だ。また、全国に先駆けてコンクリート護岸が採用された。この護岸は90年以上たった今も残っており、当時の技術力の高さを示している。

新釧路川は昭和6(1931)年に完成。分流点に岩保木水門が設置され、平常時は開放して木材流送や舟運の便を図り、洪水時や冬には釧路川側を閉鎖することで市街地に洪水や土砂、氷塊が流入するのを防いだ。

新釧路川の工事で基礎地盤を掘削したため、周辺の地下水位が低下し、泥炭地が利用できるようになった。さらに、新釧路川の水を利用する製紙工場などの産業も発展。また、釧路港への土砂流入問題が解決したことで釧路川の河口付近に埠頭が建設された。

昭和42(1967)年に釧路川が一級河川の指定を受けた際に、実際の水の流れから新釧路川の方が「本流」と認定されたため、新釧路川を「釧路川」、本来の下流部を「旧釧路川」とする名称変更が行われた。しかし釧路市民が慣れ親しんだ釧路川に「旧」が付け加えられたことに不満の声が上がり、名称復帰運動が起こる。そ

の結果、平成13(2001)年4月5日に国土交通大臣の告示で以前の名称に戻された。

新釧路川は、平成26年度に土木学会の「選奨土木遺産」に認定された。これは人々の暮らしを支えてきた歴史的な土木施設とその役割を後世に伝えることを目的に創設されたもの。洪水や釧路港への土砂流入を防ぎ、地域の発展を支えたことが評価された。

### 繁華街は南から北へ

阿寒川の治水工事が進められていた明治34(1901)年、釧路～白糠間の鉄道が開業し、釧路駅が橋の北側の低地(現在の釧路市役所付近)に開設された。これをきっかけに、市街地が橋の北側にも広がり始める。大正6(1917)年に釧路駅はさらに北側の現在地に移転すると、金融機関などが続々と北大通に移転した。新釧路川の建設で水害リスクが大幅に減ることが予想されると、北大通の市街化が加速した。昭和5(1930)年、南大通にあった丸三越後屋呉服店が北大通に移転して百貨店「丸三鶴屋」としてオープンしたことが決定打となり、繁華街はほぼ北大通に移った。

それからおよそ100年。かつて旧市街のメインストリートだった南大通界隈が、現在、若い世代を中心に「元町」と呼ばれ親しまれている。複雑な地形が北大通とは違った雰囲気を出すこのエリアが、もしかすると釧路の未来の発信拠点になるかもしれない。

和田 哲(わだ・さとる)  
街歩き研究者

■ profile  
1972年札幌市生まれ。札幌旭丘高校、日本大学法学部卒業後、広告代理店や地元情報誌「O.tone」編集者を経て独立。古地図や古写真、道路のずれから札幌の歴史をひもとき、雑誌連載やYouTube、講演活動などで発信している。2015年にNHK「プラタモリ」札幌編で2人目の案内人を務め、現在はHBC「今日ドキッ!」やHBCラジオ「朝刊さくらい」(毎週金曜日)などに出演中。著書に「古地図と歩く札幌圏」シリーズ(あるた出版/2020年~)。

